

「あの日の声を探して」アフタートーク

元朝日新聞ヨーロッパ総局長外岡秀俊さん

(2015年6月6日、シアターキノ)

私は2002年から06年までロンドンに駐在していました。朝日新聞のヨーロッパ総局長はロシアからイギリスまでをカバーしているのですが、この映画の舞台となったチェチェンには行くことができませんでした。それはロシア側が外国人ジャーナリストを受け入れていないからです。

現地を見ていないことや、両親が殺される戦争の映画ということもあり、今回のトークのお話を中島洋さんからいただいた時、気が重くなって実は少々ためらいました。でも、事前にDVDで、この作品を見て『一人でも多くの人に見てもらいたい』と考えが変わりました。今日は、多くの方々に見てもらう手伝いを少しでもしたいと思って出てきました。皆さんも、この映画を見るまでは少し気が重かったのではないのでしょうか。でも、見終わった今、お気持ちはいかがですか？ 勇気づけられた思いをされておられるのではないのでしょうか。

映画にはEJU人権委で活動する女性、赤十字が運営する孤児院にたずさわる女性、戦地から命からがら脱出していく女性たちが登場します。いずれも崇高で気高く美しい女性たちです。特に姉役の女性にはその表現力に圧倒されました。

主人公ハジ役の子どもも良かったですね。戦争のショックで言葉を失うのですが、そのかわり目の表情が何ともいえない。ダンスのシーンも素晴らしい。

ミッシェル・アザナヴィシウス監督はユダヤ系フランス人だと思うのですが、前作「アーティスト」でアカデミー賞5部門を取り、一躍有名になりました。「アーティスト」は、映画がサイレントからトーキーに変わる時代の心温まる作品なのですが、私は今回の「あの日の声を探して」と共通する点を感じました。

それは「音」です。「アーティスト」は基本的に無声映画なのですが、ある瞬間に「音」が出てきます。ちょっとした物音だったり、犬の鳴き声だったり……。そこでサイレントの時代が終わったことを主人公の男優は悟るわけですが、今回の作品でも、少年は残酷な場面に遭遇し、あることがきっかけとなって声を取り戻し、物語がさらに動き始める。有名なチャプリンの「独裁者」も、それまで無声だったのが、あの有名な演説シーンで初めて音声が出てくる。私には、この二つの作品がアザナヴィシウス監督からチャプリンへのオマージュのように思えたものです。

「あの日の声を探して」は、1947年のアメリカ映画「ザ・サーチ」のリメイク版です。邦題は「山河運かなり」と言っていて、オーストリア出身のユダヤ人フレッド・ジンネマン監督の作品です。第二次世界大戦のヨーロッパで声を失った9歳の少年が米兵に助けられ、強制収容所で別れた母親を探す物語で、話の大筋は似ているのですが、違う点が三つあります。

一つは少年を助けたのが「ザ・サーチ」では男性(モンゴメリー・クリフト)だったのが「あの日の一」では女性だったこと、二つはチェチェンに攻め込むロシア兵の若者をフィーチャーしたこと。ごく普通の若者が軍隊の中で過酷な体験をすることで残酷な人間に変わっていく。この若者をめぐる、もう一つのドラマが、殺される側、殺す側双方の深層をたらえて「あの日の一」を単なるヒューマンドラマに仕上がったと思います。

三つ目はEJU人権委の女性の存在です。彼女は、チェチェン難民の窮状を見て、欧州議会に訴え出るわけですが、議員たちは全く気乗りしない顔をしている。これは、「ザ・サーチ」の背景となったアウシュビッツなどユダヤ人強制収容所の存在をめぐるヨーロッパ人の姿勢にも通じる話です。

ヨーロッパの人は戦時中から強制収容所のことを薄々とは感じていたのです。いくらナチスドイツがしたことと言っても、占領下で鉄道などの運行に協力せざるを得なかった人はいましたし、そもそも600万人ものユダヤ人が殺されたのです。

しかし、戦時中、ドイツに対する明確な批判はヨーロッパの中からは出てきませんでした。私が取材したあるユダヤ人の証言では、スイスに逃れて強制収容所のことを訴えたけれども、誰も信じてくれなかった。その意味で、チェチェンは、最初に触れたような情報統制もあり、いわば「忘れられた戦争」となっています。映画は、この点を鋭く突いています。

チェチェンは、ロシア南部、グルジア共和国に接しコーカサス山脈が近くにある国です。住民はイスラム教スンニ派が多く、伝統的に黒海への出口を求めロシアに対して住民が反乱を起こし、一時は独立を果たしたものの、その後ロシアに併合されました。第二次世界大戦では、スターリンから「ナチスドイツに協力した」として多くの住民が中央アジアへ強制移住させられ、フルシチョフの時代になって故郷に戻ることができたという歴史をたどりました。

運命が大きく変わったのは1991年、旧ソ連の崩壊の時でした。権力を握ろうとしたエリツィンは、自分を支持すればチェチェンなどの小国に独立を認めると言ったのですが、そのエリツィンは、ゴルバチョフを拘束した共産党幹部の8月のクーデターに遭うなど国内も混乱しました。ちなみに、私はその後、ゴルバチョフに1時間ほどインタビューしたことがあるのですが、幽閉された彼は「殺されると思った」と述懐していました。

そのクーデターが三日天下で終わり、その年の12月、チェチェンは主権国家としての宣言を発します。ところが、チェチェンなどに独立を約束したはずのエリツィンは手のひらを返して経済制裁などを始め、1994年には軍隊を投入して弾圧を始めました。これに対してチェチェンの人たちは山岳ゲリラ戦で対抗し、96年、とうとうロシア軍は撤退に追い込まれます。これが第一次チェチェン紛争です。

しかし、先にお話したように、ロシアは伝統的に黒海への出口を求め続けます。99年8月、首都モスクワでアパートでの爆発で300人が死亡するなど不可解な事件が相次いで起こります。エリツィンはプーチンを首相代行に任命し、プーチンは9月、無差別空爆に続いて10月に地上軍を投入します。これが第二次チェチェン紛争で、映画は、この時期を舞台にしています。そして、エリツィンが12月に表舞台を去り、プーチンが名実ともに権力者の座に上り詰めたのです。

しかし、この間、国際社会は映画でも触れられたように全く冷淡でした。こうした構造は今日に至るまである意味で続いています。

チェチェンでは人口100万人のうち20万人が殺され、30万人が難民国家となったと言われていいます。こんな大問題にもかかわらず、最初にお話したように、外国人ジャーナリストがチェチェンに入ることができないでいることや、2001年の9.11同時爆破テロでアメリカを支持したプーチンに対し、アメリカもチェチェンでのことを言えなくなりしました。もう一つの超大国、中国も自国内で少数民族を力で抑え込んでいる手前、ロシアを批判できません。ヨーロッパ全体も米国が「対テロ戦に立ち上がり」という旗の御旗がある中では声を上げない状態に押し込められています。先に述べた「忘れられた戦争」といわれる由縁です。その意味で、アザナヴィシウス監督はこの映画で「一人でも多くの人に忘れ去られていくチェチェンを思い出してほしい」と問題提起したのです。

チェチェン問題を扱った映画はもう1本あります。2003年、アメリカで制作された「すべては愛のために」です。難民救済に命をかける男性に恋をしたアメリカ人女性が、国連高等弁務官事務所(UNHCR)で働くようになり、彼を連れてアフリカからカンボジア、そしてチェチェンと巡り歩く話で、この女性を演じたのがアンジェリーナ・ジョリーでした。

私は彼女に1時間ほどインタビューしたことがあるのですが、大変聡明な方で、難民問題にも関心が深く、自分ひとりで難民キャンプを訪問して実情を調べているそうです。女優としてのタイプは違いますが、晩年、UNICEFの活動に尽くした女優、オードリー・ヘプバーンを思い起こさせる方でした。

最後に少し宣伝をさせていただきます。私は「中原誠一郎」のペンネームで小説を書いて「カノン」(河出書房新社)に続いて「ドラゴン・オブション」(小学館)を今春上梓し、6月5日に「未だ王化に染はず」(小学館文庫)という作品を出しました。本屋さんで見かけたら、手に取ってくだされば幸いです。本日はありがとうございました。(拍手)

(文責・鈴木隆司 / suzusap@dream.bbexcite.jp)

シアターキノ23周年記念企画第5弾！



6/6
[土]

あの日の声を探して

The Search

公開記念トーク

6/6 (土) 13:50~

※上映終了後にトークがございます。
※料金は通常料金ですが、招待券、
パス券等のご利用いただけません。
※当日はAM9:25~受付いたします。

ゲスト

外岡秀俊さん(元朝日新聞社ヨーロッパ総局長)



1999年、ロシアに侵攻されるチェチェン。両親を目の前で殺され、声を失った少年。自分の無力さに絶望するEU職員。ロシア兵にされ、殺人兵器と化していくごく普通の青年。人として尊厳を踏みつけられ、大切なものを奪われても、希望の光を探し求める者たち。その背景をヨーロッパの状況に詳しい、元朝日新聞ヨーロッパ総局長の外岡秀俊さんにお話いただきます。

『あの日の声を探して』のロビー展示ができました！



アカデミー賞受賞作『アーティスト』の監督が描く、衝撃の感動作

あの日の声を探して

知ってほしい。戦場下でも、たくましく生きる子どもの生命力を。

言葉でははなされぬ、過酷な現実をひそむ人間の真実が、口をきかない少年の沈黙から伝わってくる

谷川俊太郎

人間が人間らしく生きるための、切実な戦いがある！

心をつなぐために、涙を流す

もう希望は無意味ではなくなる、東洋の

88年『さよなら子供たち』
98年『ライフ・イズ・ビューティフル』、11年『サラの鍵』
子供たちはいつだって、絶望の中でも懸命に生きている。